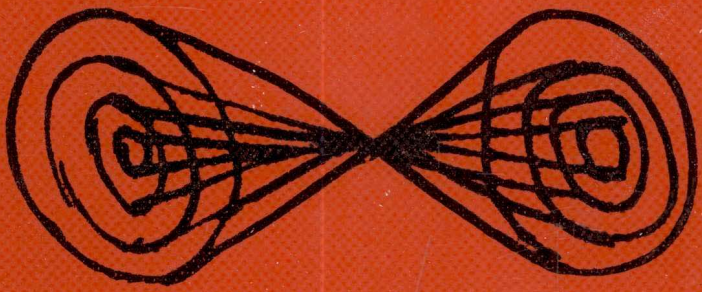

中國古典詩集★

詩經國風

楚　　辭

橋本　循　青木正兒譯

世界文學大系

筑摩書房版

世界文学大系 7A

中国古典詩集 ★

昭和36年 6月25日発行

定価500円

訳者 橋本循 青木正児

発行者 古田晁

印刷者 山元正宜

発行所 株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165768 電話 (291) 局7651

目次

詩經國風

橋本循譯

周南 5
召南 20
邶風 36
鄘風 66
衛風 82
王風 99
鄭風 112
齊風 137
魏風 151
唐風 161
秦風 177
陳風 193
檜風 204
曹風 209
豳風 216
解說 234

楚辭　青木正兒譯
卜居 241
漁父 244
九歌 246
九章 264
離騷 304
天問 328
招魂 355
遠遊 367
解說 378
詩經と楚辭　吉川幸次郎 387

裝幀　庫田發

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

詩經國風

凡例

一　本書の本文は朱熹の詩経集伝の監本に拠った。

二　本書に参引した書名は簡に従うて左のように略号を用いた。

○毛詩草木鳥獸蟲魚疏　呉、陸璣撰（陸疏）
○毛詩正義　漢、毛亨伝（毛伝）
漢、鄭玄箋（箋）
唐、孔穎達疏（孔疏）
○毛詩本義　宋、欧陽修撰（本義）
○詩総聞　宋、王質撰（聞）
○詩緝　宋、厳粲撰（厳緝）
○詩経集伝　宋、朱熹撰（集伝）
○呂氏家塾読詩記　宋、呂祖謙撰（呂記）
○続呂氏家塾読詩記　宋、戴溪撰（続呂記）
○詩集伝名物鈔　元、許謙撰（名物鈔）
○毛詩原解　明、郝敬撰（原解）
○詩経世本古義　明、何楷撰（古義）
○詩経説約　明、顧夢麟撰（説約）
○欽定詩経伝説彙纂　清、康熙勅撰（彙纂）
○詩経稗疏　清、王夫之撰（稗疏）
○毛詩稽古篇　清、陳啟源撰（稽古篇）
○毛詩訂詁　清、顧東高撰（訂詁）
○詩経通論　清、姚際恒撰（通論）
○虞東学詩　清、顧鎮撰（学詩）
○読風偶識　清、崔東壁撰（偶識）
○詩貫　清、張叙撰（詩貫）
○毛詩識小　清、林伯桐撰（識小）
○毛詩通攻　同、同（通攻）
○毛詩伝箋通釈　清、馬瑞辰撰（通釈）
○毛詩後箋　清、胡承珙撰（後箋）
○毛詩説　清、荘有可撰（説）
○詩説考略　清、成僕撰（詩説考略）
○詩地理攻略　清、尹継美撰（攻略）
○毛詩伝疏　清、陳奐撰（伝疏）
○毛詩多識　清、多隆阿撰（多識）
○学詩詳説　清、顧広誉撰（詳説）
○学詩正詁　同、同（正詁）
○経伝釈詞　清、王引之撰（釈詞）
○経義述聞　同、同（述聞）
○詩経原始　清、方玉潤撰（原始）
○毛詩学　民国、馬其昶撰（学）
○詩経通解　民国、林義光撰（通解）
○詩経釈義　民国、屈万里撰（釈義）
○詩経新注　本邦、山本章夫撰（新注）

周南

むかし虞・夏の際に后稷（名は棄）というものがあり、これが周の始祖である。その後裔の公劉が豳（陝西栒邑県付近）に都し、八世の古公亶父（周の太王）に至って岐山の南の周（陝西岐山県付近）に国を遷した。これを岐周という。その孫の文王のとき周から豊（陝西鄠県）に徙る。そこで今までの岐周の故地を分けて周公旦と召公奭の采地とした。召も地名で、これは周の内の別名である。周公旦は文王の子、武王の弟であり、召公奭も周と同姓で姬氏である。周・召二公は太王から文王に至る先公たちの教をそれぞれの采地に施し、その徳化が遠く南国にまでも行われ、それが民俗にあらわれた詩がすなわち周南、召南の詩であると旧来説かれてきたのである。朱子は「周の国から集めた詩とその上に南国の詩を交えとって周南といい、南方の国国から出た詩だけをあつめて召南という」と説いているが、これは「南」という字を説明しようとしたものであろうが、今一つ言わんと欲するところが明瞭でない。崔東壁は「これは周公と召公が治を分ち、おのおの風謡を集めたもので周公の采めたものが周南、召公の采めたものが召南というだけのことだ。かつ周公の子は世世周公であり、召公の子は世世召公であって、それらのものの采めた詩も含まれているのである。『南』とは詩の一つの体で、本は南方に起ったもので、北人がまねしたものをも南と名づけた。楚詞をまねしたものを総じて楚詞と名づけるようなものだ」と説いているが、これも今一つ隔靴搔痒の感を免れない。結局朱子も崔東壁も「南方から出た詩」とか「南方の詩」ということを「南」の一字から引き出しているのである。この「南」の一字に就ては古来種種なる説明が行われてきたが徹底的な結論は得られない。この点に於て近人鄭賓于氏の中国文学流変史に言うところは大に参考とするに足るものがある。次にその大略を記す。

それは鄭玄の「詩譜」に「周・召は禹貢の雍州岐山の陽の地名にして今は右扶風美陽県に属す」とある。山の南を陽といい水の北を陽という例によれば鄭氏が岐山の陽というのは岐山の南のことである。岐山の南は漢水・汝水・潁水・江水の在るところで楚国の北部の地である。故に周・召二地の南はすなわち岐山の南で、すなわち楚の地である。

又、鄭樵の「通志」の昆蟲草木略の序に「周は河洛を為め、召は雍岐を為めた。河洛の南は江に瀕し、雍岐の南は漢に瀕する。江漢の間が二南の地で、詩の起った所はここである。屈宋以来、騒人辞客、多く江漢に生じた。故に仲尼は二南の地を以て作詩の始とした」という。

さらに、宋の林艾軒（名光朝字謙之）が「与二宋提挙一書」に「周召以南の国、江・漢・汝墳の如き小国何ぞ数えん。其風土有する所の詩は並に之を二南に見る。則ち詩の萌芽は楚人之を得たりと為す、又一変して離騒となる」とある。以上の説によって二南が楚風であることは明かである。いわゆる周南、召南はいずれも周公や召公の徳化が南国に及んだという意味のものではなくして、周より以南の地に於て、また召より以南の地に於て採集した詩であるという意味である。

關雎　全三章

ここに一人の君子――それは諸侯か大夫――があって、みずから良き配偶者を求めている。その際の哀楽の情を、詩人が代って写したものであろう。

一

關關雎鳩
在河之洲
窈窕淑女

関関たる雎鳩は
河の洲に在り
窈窕たる淑女は

君子好逑　　君子の好逑なり

通釈　雌雄相応じて和鳴する関関たる声は雎鳩の鳴声であって、それは川の中の洲から聞えてくるのである。（それにつけても思い興すことがある。）奥ふかく物閑な家庭に育った貞潔専一な処女こそ、この君子の好き配偶者として相応しいのである。

語釈　○関関。「毛伝」には和声なりといい、「集伝」には之を敷衍して雌雄の鳥が相応ずるの声とする。すなわち、なごやかな相鳴きの声、またその形容。○雎鳩。「毛伝」に王雎なり、鳥摯にして別ありという。摯は一に鷙とかく。猛禽のこと。王雎はあらき鳥であるが雌雄の間にけじめがあって行儀がよいということである。そこで「爾雅」の郭璞の注には雎鳩を以て鶚とする。鶚は和名みさごといい、たか、はやぶさの類で猛禽である。又、鵰の類ともいう。これも、まだか、大わしのことで猛禽である。いずれも他の鳥や動物を打ちたたいて捕える鳥である。故に鷙というのである。また水上を翔けめぐって魚を攫んで食うので食魚鷹ともいう。（「厳緝」参考）○河。「集伝」に支那の北方では流水を河という、必ずしも黄河のことだけではない。○洲。「毛伝」に水中の居るべきものをいう。川の中のす、しま、なぎさ。○窈窕。「毛伝」に幽閒なり。奥ふかく物しずかなこと。そうした家庭に育ったことをいう。○淑女。淑は「毛伝」に善なり。「箋」に貞専の善女という。みさお正しく心専一の女。「集伝」に女は未だ嫁がないものの称という。○君子。「偶識」に諸侯や大夫の通称という。○好逑。「毛伝」に逑は匹なり。よき配偶者、よき相手のこと。

窈窕淑女
寤寐求之
求之不得
寤寐思服
悠哉悠哉
輾轉反側

窈窕たる淑女
寤寐之を求む
之を求むれども得ず
寤寐思服す
悠なる哉悠なる哉
輾転反側す

二

参差荇菜
左右流之

参差たる荇菜
左右之を流む

通釈　水辺には荇という野菜が或は長く或は短く参差として生えている。それを流れに従うて或は右に行き或は左に行って摘み取る。（それにつけて思い出すことがある。）何とかして奥ふかい物しずかな貞潔専一な良家の処女がないものかと、寝ても寤めても之を求めることを忘れない。これを求めても求めることができないので、寤めても寝てもこのことばかり思いつづけている。この思い、この心配は常に絶え間がないので、たとえ寝たとしても、輾転反側ばかりして、とっくりとはねむれないのである。

語釈　○参差。「集伝」に長短斉しくない形容。○荇菜。荇という野菜。水辺に生ず。「集伝」に荇は接余のこと。根は水底に生じ、茎は鋏の股の如し。上は青く下は白し。葉は紫赤にして円く径は寸余、浮んで水面に在りという。○左右流之。左右とは「集伝」に或は左し或は右し、一定の方角なきこと。流は「毛伝」に求むるなり。水の流に順うて取ること。○寤寐。寤は覚める、寐は寝ぬる。ねてもさめても、いつもかもの意。○思服。服は「毛伝」に之を思うなり。二字とも思い懐うこと。○悠哉。「詩緝」に思の長きことという。○輾転反側。「厳緝」に輾転は二字ともに臥して廻り動くこと、反側は臥して正しからざること。

三

参差荇菜
左右采之
窈窕淑女
琴瑟友之
参差荇菜
左右芼之
窈窕淑女
鐘鼓樂之

参差たる荇菜
左右之を采る
窈窕たる淑女
琴瑟之を友まん
参差たる荇菜
左右之を芼ぶ
窈窕たる淑女
鐘鼓之を楽まん

通釈　水辺には荇という野菜が、長く短く、参差として生えている。それを左へ行き右へ行き、流れに従うて取る。（それにつけても思い出すのであるが）奥ぶかい物閑な良家に育った貞潔専一な処女を、君子の配偶者として求め得たならば、君子と淑女とが朋友の如く親しむことは琴と瑟との音調の和するようであろう。さてさて長短斉しからざる荇という野菜をば、右にゆき左にゆき、流れに従うて、その美なるものを択び取るのであるが、そのように奥ぶかい物しずかな良家の貞潔な処女を求め得たならば、君子と淑女とは心なごやかに相楽しみ相親しむことは、鐘と鼓との二つの楽器の音調が少しのくるいもなく合するようであろう。（何とかして、こういう淑女をさがし出したいものである。）

語釈　○采。取る。○琴瑟友之。「集伝」に琴は五弦、或は七弦、瑟は二十五弦。みな琴の種類。友之とは「厳緝」に之を親しむこと朋友の如し。「詩貫」に始め合して和すること琴瑟の調を同じゅうするが如し。君子と淑女が朋友のように親しむことは琴と瑟との音調の相合するようである。○芼。「毛伝」に択ぶなり。「詳説」に広く采ってその美なるものを択び取る。○鐘鼓楽之。鐘はかね、鼓はつつみ、楽とは「集伝」に和平の極という。君子と淑女の心なごやかに相親しみ楽しむことは、鐘と鼓との音調の合して異なるところなきが如きをいう。

葛覃　全三章

身分の高い家の娘の結婚前後の生活とその心境とを描いた詩である。

一

葛之覃兮
施于中谷
維葉萋萋
黄鳥于飛
集于灌木
其鳴喈喈

葛の覃びて
中谷に施る
維れ葉萋萋たり
黄鳥于に飛んで
灌木に集い
其の鳴くこと喈喈たり

通釈　葛の蔓が延びて谷中を這い廻っている。その葉は萋萋と茂り盛えている。黄鳥は飛んで簇り生えている灌木の上に集り、その雌雄相応ずるの鳴声は喈喈として聞えてくる。（暮春の渓山の景物である。）

語釈　○葛。草の名。「毛伝」に葛は絺綌をつくるもの。和名、くずかつら。○覃。「毛伝」に延なり。○兮。音調を強めるときに用いる助辞。○中谷。「毛伝」に谷中なり。○于。に。句中の助辞。於、乎に通ず。○施。「毛伝」に移なり。○維。これ。意味のない発語の助辞。○萋萋。「毛伝」に茂盛の貌。○黄鳥。「毛伝」には搏黍なり。「厳緝」に黄鶯なり。関西では鸝黄という、其色は鵝黒で黄であるという。和名、ちょうせんうぐいす。○于。ここに。発語の助辞。於、曰と同じ。○灌木。「毛伝」に叢木なり。「孔疏」に木の簇り生ずるを灌となす。○喈喈。「毛伝」に和声の遠く聞えること。雌雄相応ずるなごやかな

相鳴きの声の形容。

二

葛之覃兮
施于中谷
維葉莫莫
是刈是濩
爲絺爲綌
服之無斁

葛の覃びて
中谷に施る
維れ葉莫莫たり
是れ刈り是れ濩て
絺と為し綌と為し
之を服して斁うこと無し

通釈 葛の蔓が延びて谷中に一ぱいになっている。その葉は莫莫として茂り、盛り、もう十分に成長した。そこでこの蔓を刈り、これを煮て繊維となし、それを績いで布となす。上等のものは絺となし、粗末なものは綌となす。このようにしてできたものであるから、われは之を服用して、いやになったり、そまつにしたりはしないのである。

語釈 ○莫莫。「毛伝」に成就の貌というは、「孔疏」によれば葛が成長して既に取りて用うべきほど茂盛しているという意味。○濩。「毛伝」に之を煮るなり。「孔疏」に葛を煮て以て絺綌を為るとあり。○絺綌。葛布、かたびらのこと。「毛伝」に精を絺といい、麤を綌という。細い葛糸のかたびらを絺、あらい葛糸のかたびらを綌という。○服。「通釈」に服用の義という。○斁。「毛伝」に厭うなり。

三

言告師氏
言告言歸
薄汚我私
薄澣我衣
害澣害否
歸寧父母

言師氏に告げらる
言言に帰ぐを告げらる
薄らく我が私を汚い
薄らく我が衣を澣がん
害れか澣ぎ害れか否ざらん
帰ぎて父母を寧んぜん

通釈 (以上葛の蔓で葛布を作り、いよいよ結婚ということに進んできた。)そこで、われは、わが教育係の女師から、いろいろ婦徳、婦言、婦容、婦功(しごと)のことにつき教えられ、そして、いよいよ嫁ぐことになったことを告げられた。そこで衣服の整理をなさねばならぬ。努めてふだん着の垢を洗い落し、或は努力して式服の垢を濯わねばならんが、さてどの着物を濯うべきか、どれは洗わないでもよいかと丹念に撰択せねばならぬ。ともかく夫の家に嫁いで、里の父母の羞をのこさぬように、そして父母の心を安心させねばならぬ。

語釈 ○言告師氏。「毛伝」に言は我なり、師氏は女師なり、古えは女師が婦徳・婦言・婦功を教えた、「箋」に我女師から教え告げられた、我に教え告げるに人に適くの道を以てす。○言告言帰。「伝疏」に言帰の言は曰にと訓ずる、発語の助辞。帰は「毛伝」に婦人が嫁ぐことをいう。○薄。後に出てくる周南の芣苢の詩の「毛伝」に薄は辞なりとあり、助辞となす。ただ「稗疏」によれば、薄には勉める、努めるという意味がある。助辞も漫然と加えるのでなく、それぞれ意あって用いているのであるという。○汚。「毛伝」に煩なり。「伝疏」に煩は垢を洗うことをいう。○私。「毛伝」に私は燕服なり。ふだん着のきもの。○澣。「箋」に之を濯うをいう。○衣。「集伝」に礼服なり。式服のこと。○害。曷と音通、「毛伝」に害は何なり。何れをか。何をか。○否。不と同じ、否定の辞、然せず。○帰寧父母。「通釈」にこの帰は反るという意ではなく、婦人の嫁ぐことを帰というの意である。寧は安んず、寧父母とは婦人が嫁いでから、夫の家にて父母の羞を遺すことのなきよう、父母の心を安神させること。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

卷耳　全四章

婦人が其夫の遠く公役に従うものを念い、其労苦を憫いた詩である。第一章は婦人みずからを我となし、二章以下に於ては其夫を我となし、夫の身になってその艱難を詠じたものであろう。

一

采采卷耳
不盈頃筐
嗟我懷人
寘彼周行

卷耳を采り采る
頃筐に盈たず
嗟我人を懷うて
彼の周行に寘く

通釈　脇目もせずに卷耳を摘み取っているのであるが、なかなか、竹のかごに一ぱいにならぬ。というのも、あの行役に出ているわが夫のことが気にかかるからだ。ああ、われはわが夫が、いかにしているかと考えると、復た此の草を摘む元気も失せて、大道にかごを投げ出すのである。

語釈　○采采。後の「芣苢」の詩の「毛伝」に采は取るなり。此詩の「毛伝」に之を采るを事とするなり。一心になって取ること、摘むこと。○卷耳。「毛伝」に苓耳なり。「陸疏」に葉は青白色、胡葵（こえんどう）に似て、白い華で細い茎で、蔓生で煮て茹（したしもの）となすべし、四月中に子を生ず、婦人の耳璫（みみだま）の如し、或は耳璫草という。和名、はこべ。○傾筐。「毛伝」に畚の属。「集伝」に頃は欹、筐は竹器という、いびつの竹のかご。○我。婦人みずからをいう。○懷人。懷は思う、人は婦人が夫を指す。○寘。「毛伝」に置くなり。○周行。「集伝」に大道なりという。

二

陟彼崔嵬
我馬虺隤
我姑酌彼金罍
維以不永懷

彼の崔嵬に陟れば
我が馬虺隤たり
我姑らく彼の金罍に酌み
維れ以て永く懷わざらん

通釈　（これより以下は、婦人が其夫の身となって咏じたものとする。）われ遠く行役に出ている。かの高いけわしい山に登ろうとすれどわが馬はつかれて升ることができない。われの労れていることはいうまでもない。そこで、ともかく、あの金罍に酒を酌んで、みずからをなぐさめいたわり、以て遠征従役の苦しみを忘れ、いつまでも、くよくよしないように努める。

語釈　○陟。「毛伝」に升るなり。○崔嵬。「毛伝」に土山の石を戴くものという。○我馬。此の我は「偶識」に夫の身になって我といったもので、即ち行人を指していうのである。「後箋」におよそ詩中の我の字は、其人みずから我とするあり、他人に代って我というあり、一篇の中、並見するを妨げずという。この我を含めて以下の六つの我はみな夫に代って我というのである。○虺隤。「毛伝」に病なり。「集伝」に馬罷れて高きに升る能わざるの病なりという。○姑。かりに。かりそめに。「毛伝」に且なり。○金罍。黄金を以て装飾した酒樽。「釈文」に罍は酒罇なりという。○以。「箋」には是を以て、「孔疏」には此の故を以てと解する。○永。「毛伝」に長なり。

三

陟彼高岡

彼の高岡に陟れば

我馬玄黄　　我が馬玄黄たり
我姑酌彼兕觥　　我姑く彼の兕觥に酌み
維以不永傷　　維れ以て永く傷まざらん

通釈　われ、かの高い山の脊にのぼろうと思っても、わが馬は病みて、黒き毛並が黄色となってのぼることができない、われの疲労していることは、いうまでもない。そこで、ともかく、あの兕牛の角のさかずきに酒を酌んで之を飲み、以て征役の苦痛から逃れて、いつまでも、くよくよしないように努める。

語釈　○高岡。「毛伝」に山の脊を岡という。山の尾根のこと。○玄黄。「毛伝」に玄き馬の病むときには黄となる。○兕觥。兕とは「孔疏」に牛に似た動物で一角で青色、その角でつくったさかずき。觥は爵の称なり。○傷。「毛伝」に思うこと。

四

陟彼砠矣　　彼の砠に陟れば
我馬瘏矣　　我が馬は瘏み
我僕痡矣　　我が僕は痡む
云何吁矣　　云何せん吁

通釈　われ、かの石山の高きに登らんとすれども、わが馬は疲れて進むことができず、わが車の御者も疲れて行くことができぬ。いまは如何ともすることができず、ただ憂い嘆ずるばかりである。

語釈　○砠。いしやま。「毛伝」に石山の土を戴くものという。○瘏。「毛伝」に病なり。「孔疏」に馬疲れて進む能わざる病。○僕。車の御者。○痡。「毛伝」に病なり。「孔疏」に人疲れて行くこと能わざる病という。○云何。「通解」には如何と読む。○吁。「集伝」に憂え嘆ずるなりという、嘆詞である。

樛木　全三章

夫婦の和合している家庭和楽の状態を歌ったものであろう。

一

南有樛木　　南に樛木あり
葛藟纍之　　葛藟之に纍る
樂只君子　　楽しいかな君子
福履綏之　　福履之を綏んず

通釈　南の山に枝の垂れて曲った木があり、それに葛や藟の蔓が繞いついている。（思い興すことは、妻が夫にたより、夫はたよられるに値する平和な夫婦のことである。）楽しいことであるわい、かかる君子には、いつも幸福と和気があつまって、夫婦の間を安泰ならしめている。

語釈　○南。「集伝」に南山なり。○樛木。「毛伝」に木の枝の下って曲ったもののこと。○葛藟。「孔疏」に葛と藟とは異るが、種類は同じ。「陸疏」に藟も亦延蔓して生じ、葉は艾のように白色、その子は赤く、亦食うべきも酔っぱくて美くない。和名、かずら？　○纍。「釈文」に纏い繞うなり。○楽只君子。只は「釈詞」には句中の語助辞とする。「説文」段注には語止の詞とする。君子。夫たるべき人を指す。「厳緝」には楽哉君子という意であろうという。○福履。「毛伝」に履は禄なり。「伝疏」に禄もまた福なり。○綏。「毛伝」に安なり。

二

南有樛木
葛藟荒之
樂只君子
福履將之

南に樛木あり
葛藟之を荒う
楽しいかな君子
福履之を将く

通釈　南の山に枝の垂れ曲った木があり、それを掩いかくすように葛や藟が繞いついている。（それにつけても思い興すことは、妻が夫にたより、夫はたよられるに値する平和な夫婦のことである。）楽しいことであるわい、かかる君子には、いつも幸福と和気があつまって、夫婦の間を安泰ならしめるべく助けている。

語釈　○荒。「毛伝」に奄。「伝疏」に奄は掩と通ず。おおう。○将。「箋」になお扶助のごとし。たすく。

三

南有樛木
葛藟縈之
樂只君子
福履成之

南に樛木あり
葛藟之を縈る
楽しいかな君子
福履之を成す

通釈　南の山に枝の垂れ曲った木があり、それに葛や藟の蔓が繞いめぐっている。（それにつけても思い興すことは、妻が夫にたより、夫がたよられるに値する平和な夫婦のことである。）楽しいことである、かかる君子には、いつも幸福と和気とがあつまって、夫婦の間を完全に安泰ならしめる。

語釈　縈。「毛伝」に旋なり、めぐる。○成。「毛伝」に就なり、成る。

螽斯　全三章

この詩は何を歌ったものか、よくは分らない。詩人が野外を行き螽斯の群飛するを見て、単に之を詠じたものと見るもよかろう。或は序にいう如く、后妃が衆妾に対して嫉妬しないので、つぎつぎに子孫が衆く生れる。それを歌ったものであるかも知れぬ。

一

螽斯羽
詵詵兮
宜爾子孫
振振兮

螽斯の羽
詵詵たり
宜なり爾の子孫
振振たること

通釈　野外を行くに、羽のある螽斯が、まことに数の多いことである。もっともなことである。なんじ螽斯の子孫が繁殖して盛んなことは。

語釈　○螽斯。「毛伝」には蚣蝑なりとあるが「蔵緝」によるに、螽斯と蚣蝑とは異るもので、螽斯は阜螽のことで、即ち蝗であり、蠻であり、螣である。此の虫は一斉に群り飛ぶものである。螽斯の斯は語助辞であって小雅「小弁」の詩の鴛斯とか鹿斯の斯と同じである。また螽斯は一度に八十一子を生むとか九十九子を生むとかいわれる。和名、いなご。○羽。これはその飛ぶときを見て羽と言ったのである。○詵。衆多の形容。「毛伝」に衆多なり。○宜。うべ。むべ。もっともなこと。「伝疏」に上を承けて下に転ずるの詞という。○爾。「集

伝」に螽斯を指す。○振振。「集伝」に盛んなる貌。

二

螽斯羽
薨薨兮
宜爾子孫
繩繩兮

螽斯の羽
薨薨たり
宜なり爾の子孫
繩繩たること

通釈 野外を行くに羽のある螽斯が一斉に群り飛ぶ声が薨薨と聞える。もっともなことである、なんじ螽斯の子孫が繁殖して絶えないのは。

語釈 ○薨薨。「集伝」に群り飛ぶ声。○繩繩。「集伝」に絶えざる貌。

三

螽斯羽
揖揖兮
宜爾子孫
蟄蟄兮

螽斯の羽
揖揖たり
宜なり爾の子孫
蟄蟄たること

通釈 野外を行くに羽のある螽斯がかしこここに聚っている。もっともなことである、なんじ螽斯の子孫が繁殖して和ぎ集っているのは。

語釈 ○揖揖。「毛伝」に会り聚る貌。○蟄蟄。「毛伝」に和ぎ集まる貌。

桃夭　全三章

新婚を詠じた詩である。

一

桃之夭夭
灼灼其華
之子于歸
宜其室家

桃の夭夭たる
灼灼たる其の華
之の子于に帰ぐ
其の室家に宜しからん

通釈 夭夭然としてわかわかしい桃の木があり、華が開いて灼灼然として盛んである。（この桃の少壮と花の鮮明とを想わしめるに足る容色佳麗の女がある。）この女が夫の家に嫁いだならばさぞかし和順で夫婦の道に善処するであろう。

語釈 ○夭夭。「毛伝」には桃の少壮なる也。灼灼。「毛伝」に華の盛なる也。「孔疏」に桃少し故に華盛なりとは、以て女少くして色の盛なるに喩えたのである。○之子。是子に同じ。「毛伝」に嫁ぐ子のこと。○于。於に同じ、語助辞。○帰。嫁ぐこと、「葛覃」の詩に見ゆ。○宜。「集伝」に和順なること。「通釈」に宜其室家、宜其家人とは皆其室家と家人に善処することをいうとあり。○室家。「集伝」に室は夫婦の居るところ、家は一門の内をいうとあり、夫婦、家庭のこと。

二

桃之夭夭
有蕡其實
之子于歸
宜其家室

桃の夭夭たる
蕡たる其の実あり
之の子于に帰ぐ
其の家室に宜しからん

通釈 夭夭然としてわかわかしい桃の木があり、蕡然として桃の実が

錯雑してみのっている。（この桃の少壮とたくさんの実のなっているのを想わしめるに足る容色才徳兼備の女がある。）この女が夫の家に嫁いだならば、さぞかし和順で夫婦の道に善処するであろう。

語釈　○賁。「毛伝」に実れる貌、但だ華色あるのみにあらず、又婦徳ありという。「後箋」に木実錯雑の貌という。○家室。「毛伝」になお室家のごとし。

三

桃之夭夭
其葉蓁蓁
之子于歸
宜其家人

桃の夭夭たる
其の葉蓁蓁たり
之の子于に帰ぐ
其の家人に宜しからん

通釈　夭夭然としてわかわかしい桃の木があり、その葉は至って盛んに茂っていて、見るからに立派な形だ。（この桃の少壮と形体の盛んなるを想わしめるに足る容色体格のすぐれた女がある。）この女が夫の家に嫁いだならば、さぞかし和順で一門の人に善処するであろう。

語釈　○蓁蓁。「毛伝」には至って盛なる貌、色もあり徳もあり、形体至って盛なるなり。「集伝」に葉の盛なる也。○家人。「毛伝」に家の人、尽く以て宜しとなすという。

兎罝　全三章

兎罝の野人の中にも諸侯の臣として用いるに足るべきもののあることを詠じたものであろうか。

一

肅肅兎罝
椓之丁丁
赳赳武夫
公侯干城

肅肅たる兎罝
之を椓つこと丁丁たり
赳赳たる武夫は
公侯の干城たらん

通釈　縮縮と縄を結んだ兎とりの網、それを張るために杙をうつ音が丁丁と聞えてくる。その杙をうつ男を見ると、武ましい強勇の士である。こんな男は諸侯のために盾となり城となって国を衛るにふさわしいものに見える。

語釈　○肅肅。「通釈」に肅肅は縮縮の仮借であろう、縮とは物の申びないことをいう、兎罝は縄を結んで作ったもので、その結縄の状は縮縮としている、縮縮とは兎罝の結縄の状であるという。「毛伝」や「箋」では敬む形容としているが兎罝を張るのに敬しむとは如何なものであろうか。○兎罝。「毛伝」に兎の罟也。○椓。杙を椓つこと。○丁丁。「毛伝に」杙を椓つ声。杙を地中に撃ちて然る後罝を其の上に張るのである。○赳赳。「毛伝」に武の貌。○武夫。「説」には強勇の士という。○公侯。五等の爵位のなかで尊い位。「箋」には諸侯となす。○干城。「集伝」に干は盾なり、干城は皆外を扞ぎ内を衛る所以なり。「毛伝」には干は扞なりという。

二

肅肅兎罝
施于中逵
赳赳武夫
公侯好仇

肅肅たる兎罝
中逵に施す
赳赳たる武夫
公侯の好仇たらん

通釈 縮縮と縄を編んだ兎とりの網、それを野途の交叉点に張りめぐらしてある。その網を張る男を見ると、武ましい強勇の士である。この男を用いたならば諸侯の善き相談相手としてふさわしいものに見える。

語釈 ○中逵。「伝疏」に逵中と同じ、逵は野涂のことという。涂はみち。「毛伝」には逵は九達の道という。草かり山がつの往き、雉とりや兎とりの来る途の交叉点のことであろう。○施。「古義」に敷張の義とする。○好仇。「集伝」に善匹となす。善き相手、なかま、よきたぐい。又仇は逑と同じという。「関雎」の詩の「毛伝」に逑は匹なりとある。「箋」には怨耦を仇というとあって、仲のわるい夫婦が相手を仇というのであるが、それを裏返して見ると仇はよき仲間ということになる。それが好仇とか嘉耦という。治を以て乱となし、潔を以て汚とするようなものである。

三

肅肅兎罝
施于中林
赳赳武夫
公侯腹心

肅肅たる兎罝
中林に施す
赳赳たる武夫
公侯の腹心たらん

通釈 縮縮と縄を結んだ兎とりの網、それを野外の林のなかに敷き、張ってある。その網を張る男は、武ましい強勇の士である。この男をもちいたならば、諸侯の腹や心と一つになって働いてくれそうに見える。

語釈 ○中林。「毛伝」に林中のこと。「通釈」に林とは野外のこと。○腹心。己れの腹や心の中で思うが如くに働いてくれること。「集伝」に同心同徳の謂という。

芣苢 全三章

春日田家の婦女が摘草の歌であろう。

一

采采芣苢
薄言采之
采采芣苢
薄言有之

芣苢を采り采る
薄らく言に之を采る
芣苢を采り采る
薄らく言に之を有る

通釈 脇目もふらず一心に芣苢を摘み、之を摘むことにつとめる。脇目もふらず一心に芣苢を取り、之を取ることにつとめる。

語釈 ○采采。一心に取ること。「巻耳」の詩にも見ゆ。○芣苢。「孔疏」に車前草のことで大葉長穂、好んで道旁に生ずるとある。又、これは薬草で懐妊の薬、難産を治める薬用になると伝えられる。「毛伝」に芣苢は、馬舄なり、馬舄は車前なり、懐妊に宜しという。又、「稗疏」にはこの嫩葉をゆがいてたべるという。和名、おおばこ。○薄言。二字共に発語の助辞。薄には勉めるという意味がある。「葛覃」の詩にもある。○有。「通釈」に采と同義。取る。

二

采采芣苢
薄言掇之
采采芣苢

芣苢を采り采る
薄らく言に之を掇う
芣苢を采り采る

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com